月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.112



『イースIX』からの
新たな来訪者は意外な場所から!?
も〜っと集まれ!ファルコム学園

解放された学園で
喜びを分かち合う一行
英雄伝説 空の軌跡SC 〜絆の在り処〜

今月も『閃の軌跡IV』から
新キャラクターが引き続き参戦!
『英雄伝説 暁の軌跡』

『軌跡』シリーズ始まりの物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡

ファルコムニュース

今月も懐かしのキャラクターが続々参戦!
さらに攻略型コンテンツの詳細も到着!
英雄伝説 創の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



クロスベル自治州、リベール王国から
懐かしのキャラクターたちが続々と登場!!

THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】

発売まで早くも3ヶ月を迎える『軌跡』シリーズ最新作『創の軌跡』。今回はクロスベル自治州からはロイドたち特務支援課とともに壁を乗り越えた仲間たち、そしてリベール王国からは、『閃』シリーズにも登場したあの人気キャラクターや、リベール名物（？）の天才導力学者が登場！

『英雄伝説 創の軌跡』公式ホームページ
https://www.falcom.co.jp/hajimari/

タイトル：英雄伝説 創の軌跡　**発売日**：2020年8月27日予定
ジャンル：ストーリーRPG　**対応機種**：PlayStation®4　**プレイ人数**：1人
小売価格：[通常版] 7,800円(税抜) [Platinum マイスター BOX] 10,800(税抜)
CERO レーティング：C

※画面は開発中のものです。

キーア・バニングス

CV：釘宮理恵

天真爛漫な性格で誰からも愛される少女。《特務支援課》メンバーとは家族のような強い絆で結ばれている。
その正体は、500年前の錬金術師たちの手によって生み出されたホムンクルス（人造人間）。
クロスベル独立を巡る事件では因果を操る能力を持つ「零の至宝」として目覚め、その力を利用されるも《特務支援課》の活躍によって救出され、代償として力を失った。
現在は《特務支援課》保護のもと、普通の少女としての生活を送っているが因果の流れを感じ取れる程度の力の"残滓"は残っているという。







「きっとできることがあるはずだよ。キーアに"強さ"を教えてくれた、クロスベルのみんななら」

アレックス・ダドリー

CV：中井和哉



捜査一課の主任を務める、クロスベル警察きってのエリート捜査官。
規律を重んじた冷徹な振る舞いをすることもあるがその内にはアツい正義感と情熱を秘めており、彼を目標としている警察関係者も多い。
当初、ロイド達《特務支援課》には懐疑的な立場を取っていたが数々の事件に関わっていく中で彼らの想いに感化され、クロスベル警察の一員として認めるようになっていった。
クロスベル解放後も衛士隊の撤退に伴う事後処理、軍警の解体・再編、再独立調印式に向けた準備など捜査一課主任として多忙な業務に追われている。

「思い知ったか。これが正義の鉄槌というものだ！」





ミレイユ三尉

CV：中原麻衣



「まったく、いつも遅いのよ。
……馬鹿ランディ」

ソーニャ司令のもとで数多くの隊員をまとめている、クロスベル警備隊の優秀な女性士官。
クロスベル占領期は、教官として帝国のトールズ第Ⅱ分校に赴任した元同僚のランディを案じつつも、クロスベル各地に潜伏していた警備隊メンバーを率いて地道なレジスタンス活動を続けていた。
クロスベル解放後は警備隊の再編に伴い三尉から二尉へと昇進。任期を終えたランディが戻ってきたことを内心喜びつつも相変わらず痴話ゲンカのようなやりとりをしてしまうらしい。





ツァオ・リー

CV：平川大輔



「いや、しかしクロスベルも
大変なことになってしまいましたねぇ」

カルバード共和国の犯罪組織《黒月（ヘイユエ）》の幹部で、表向きは民間会社《黒月貿易公司》のクロスベル支社長。
しなやかな体躯を活かした格闘戦を得意とする東方武術の達人、《白蘭竜》としてもその存在を知られている。
組織の利益優先で動いているように見える一方、裏では警察に情報を流したり、対立組織との交渉を進めるなど抜け目なく立ち回る《黒月》随一のキレ者として上層部からも一目置かれている。
鉄血宰相ギリアス・オズボーンの逝去、ロックスミス大統領の退任など、大国間のパワーバランスに大きな変化が訪れようとしている中、《黒月》はどう動くべきかを見極めようとしているようにも見えるが……。





レン・ブライト

CV：悠木碧



「人形遊びは卒業したのよ、《博士》。
──レンはもう大人だから」

リベール王国のジェニス王立学園に在籍している学生で、並外れた頭脳と適応力を持つ小悪魔的な少女。
結社《身喰らう蛇》の執行者 No.XV《殲滅天使》としての過去を持つが、現在はブライト家の養女としてエステルらと生活を共にしている。
帝国を襲った災厄では、音信不通となった親友・ティータのためにエステル、ヨシュアと共に帝国入りし、新旧《Ⅶ組》や《魔女の眷属（ヘクセンブリード）》に協力することとなった。
その後、リベールに戻り学園生活を再開していたが、ある日結社時代から縁があるヨルグ・ローゼンベルクからの連絡を受けたレンは、ある目的のために単身、クロスベルへと向かうことに。





エリカ・ラッセル

CV：ゆきのさつき



「アガット・クロスナー専用カタパルトで
リベールまでの空の旅を楽しみにしていることね、
おーっほっほ!!」

リベール王国・ツァイス中央工房（ＺＣＦ）の博士にしてトールズ第Ⅱ分校に留学しているティータ・ラッセルの母親。
導力革命の祖として知られるＣ・エプスタイン博士の三高弟の一人、ラッセル博士を父に持ち、導力学者としてのセンスやユニークな発想力は父親をも凌駕すると噂されている。
かなり強烈な性格をしており、娘のティータを溺愛する一方彼女と親しい間柄にあるアガットに対してはいつも敵意をむき出しにしている。





『閃の軌跡』シリーズでも好評を博した 攻略型コンテンツ「夢幻回廊」が 「真・夢幻回廊」となりさらなるパワーアップを遂げて登場！



『創の軌跡』のメインストーリーを進めていくことで、各ルートから謎に満ちた異空間「夢幻回廊」へアクセスすることができるようになることが判明！「夢幻回廊」は複数の階層に分かれた広大なダンジョンで構成されており、その構造はアクセスするたびにランダム生成されるようだ。「夢幻回廊」を攻略していくと進行度に応じて様々な要素を解放、強化することができる上、メインストーリー攻略中でも自由に行き来できるので、逐次攻略していきたい。また、「夢幻回廊」は各ルートのキャラクターが集合しているので、この空間内では自由にパーティー編成ができるので、好きなキャラクターを組み合わせて進めていこう。













「真・夢幻回廊」を攻略するとメインストーリーでもパワーアップ！

攻略していくと入手できる特殊なアイテム「幻夢の欠片」を使用すると、パーティー編成時の「サポート」キャラ枠や、BP（ブレイブポイント）、AG（アサルトゲージ）など、各種システムを拡張させることが可能に。しかも、この拡張はメインストーリーにも反映されるので、どんどんと進めて行こう！



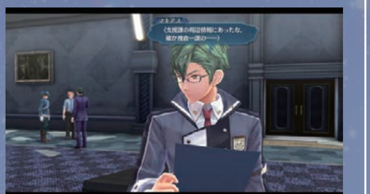
攻略していくと解放されるエピソードを一部先行公開！

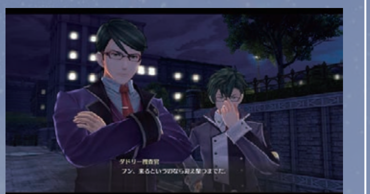
「夢幻回廊」に登場する一部の強敵を撃破することで入手した「封印石」と呼ばれるアイテムを開封すると、各キャラクターの「エピソード」や「ミニゲーム」が開封されるようだ。今回はそんなエピソードの数々から、３本のストーリーが到着した！



●「２人のジャスティス」

帝国軍引き上げの見届けにクロスベルを訪れていたマキアス・レーグニッツ監察官。
再独立調印式までの間、現場で指揮を執っていたクロスベル警察のアレックス・ダドリー捜査官。
業務の合間、いつも同じカフェで同じコーヒーを注文していた２人がとあるトラブルをきっかけに共同捜査に乗り出すことになるが……？

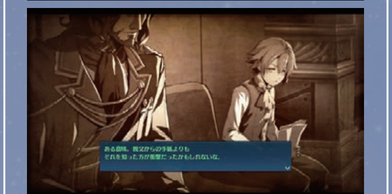




●「同窓の標」

かつてジェニス王立学園の生徒会メンバーとして学生時代を共に過ごしたレクター、ルーシー、クローゼ。リベールでの同窓会に先駆け３人でお茶会を開くことになったのだが、久しぶりのプライベートな付き合いにどこか調子が狂ってしまうレクター。
そんな中、情報局から連絡の入ったレクターはその場を後にすることになり……。





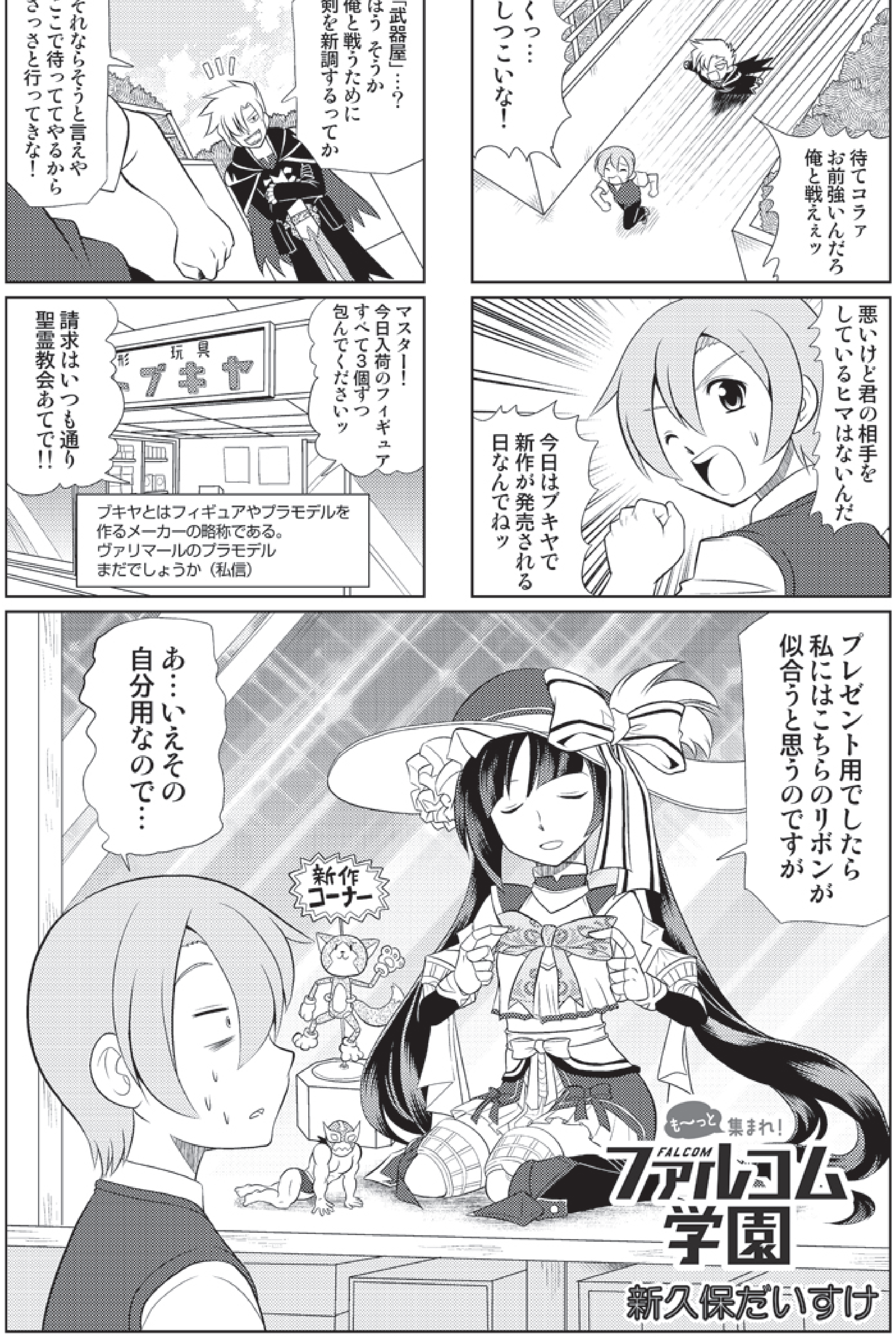
●「魔女たちの追憶」

エリンの里へと戻っていたエマはある日、ローゼリアが隠し持っていた母・イソラの手記を発見する。
母の死と何らかの関わりがあることを察したエマとセリーヌは、里を訪れていたクロチルダの協力を得て未知の霊窟へと向かうのだが……。





★立体物は同じものを3個買えば安心して遊べるという真理★



サブローもTUEE



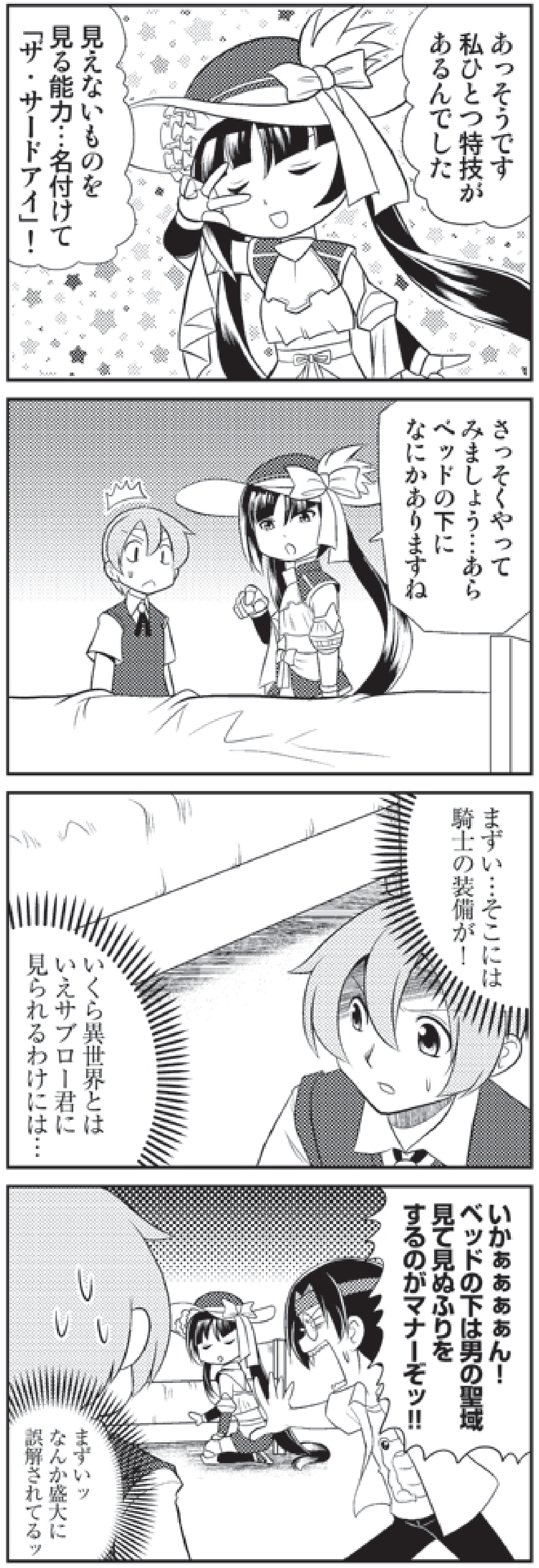
本人に聞いてみよう



いやホントかわいいんですよ マジで。これについて語るならまず(略)



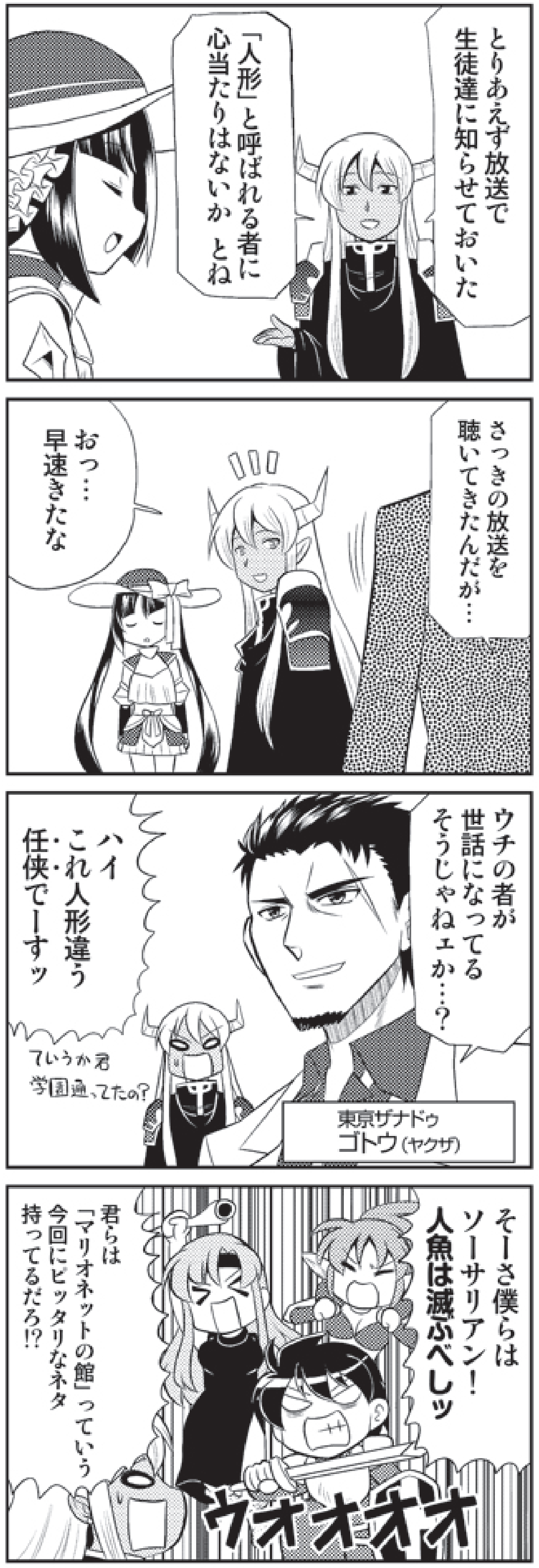
まずい流れ



ザナドゥの日常



心当たり大喜利



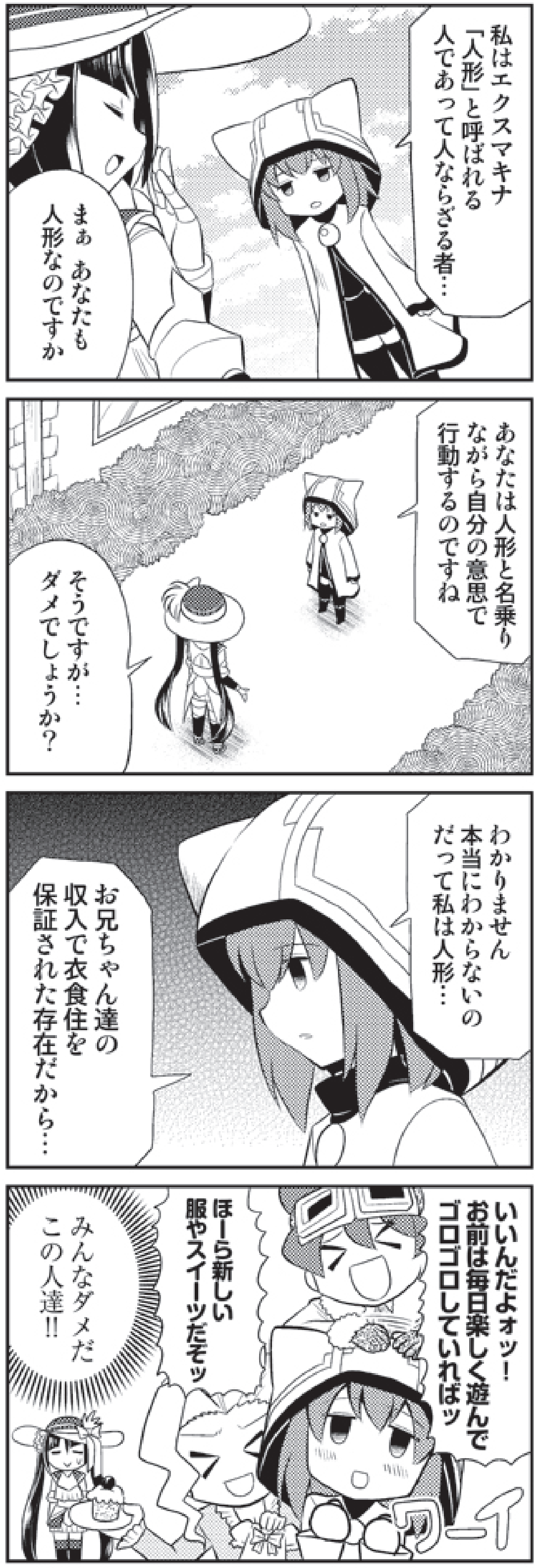
わたしのおじいさん



感情なき者



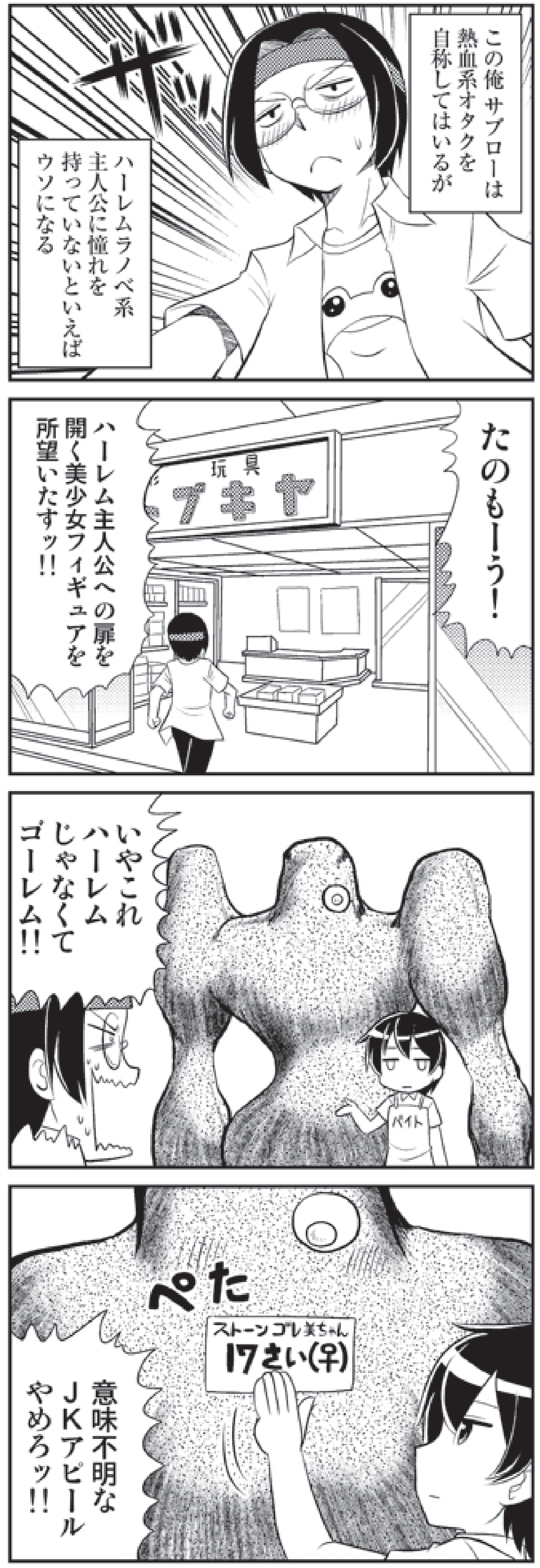
ダメ人形



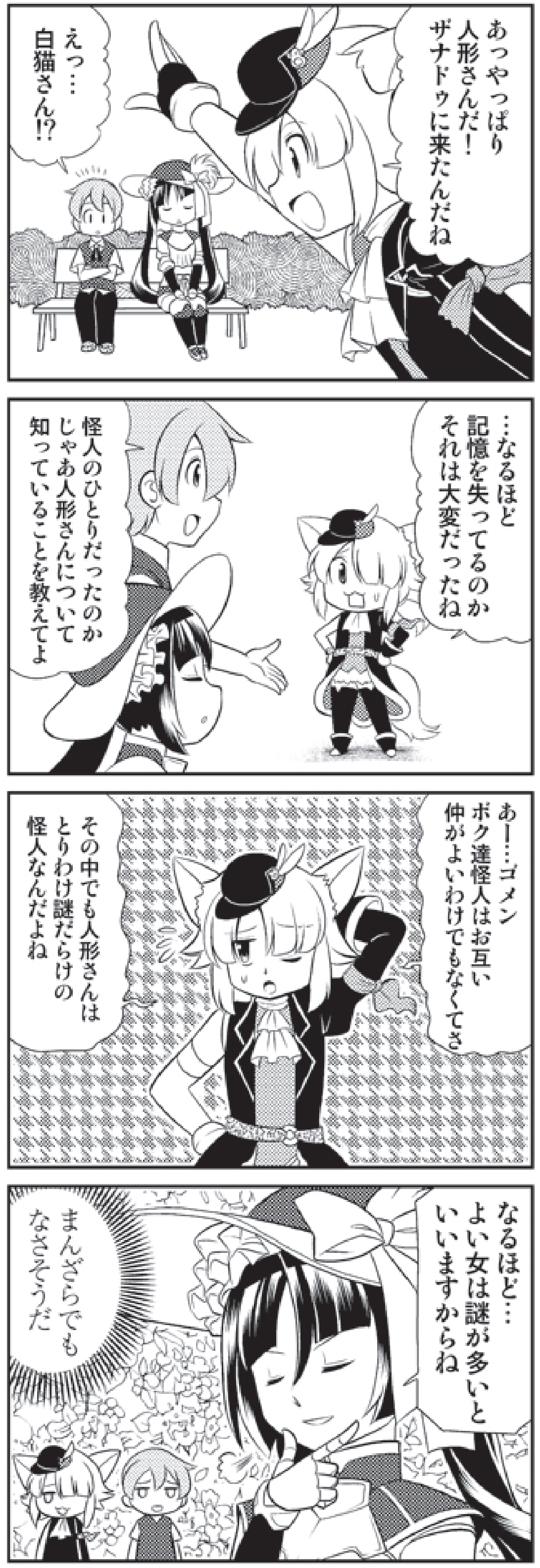
設 定



サブロー、主人公への道



怪人コミュニティ

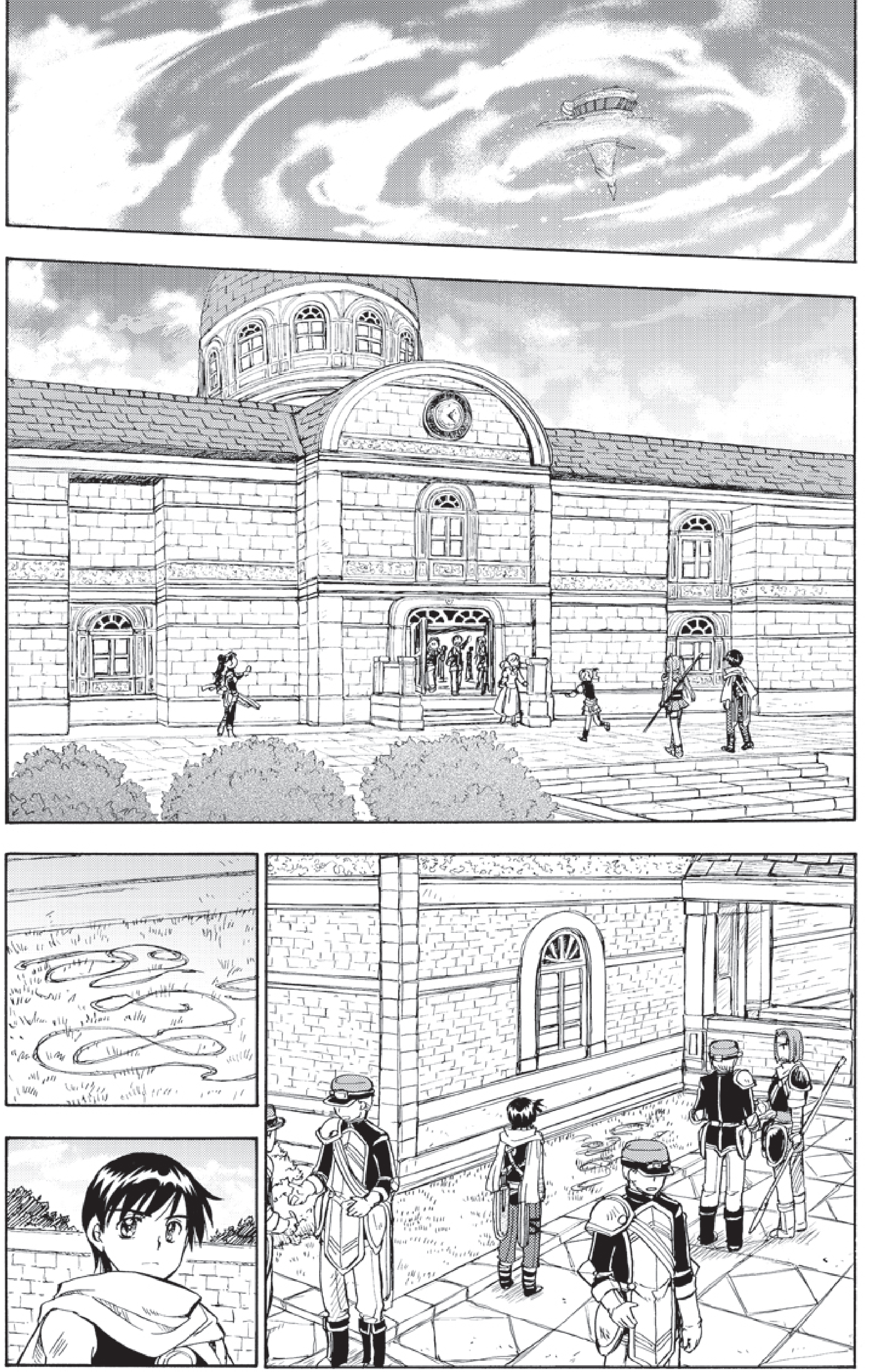


よみがえる記憶



忘れられし者






遊撃士の諸君
本当に
ご苦労だったね
おかげで
大切な生徒たちを
無事に救出する
ことができた
学園の代表者として
お礼をさせてもらうよ
あたしたちも
ほっとしてるわ
まさか学園が
襲われるなんて
夢にも思って
なかったから…
ただ…今後
学園が同じような
被害にあうことは
ないはずです
一応…敵では
ありますが
彼の約束は
ある程度
信用できると
思うので…


だが
この状況下では
リベールのどこにも
安全な場所など
ないに等しいだろう
この危機を
乗り越える
ために
今後とも
君たちの力を
貸してやって
ほしい
あっ
そっか
学園はこれから
新学期だもんね
学園生活は
大丈夫?
あたしたちにも
できることって
あるかしら!?
助けてもらっといて
なんだけど
あんまり
あたしたちを
見くびらないで
ほしいわね!
俺たち生徒会でも
対策は考えてるさ
自分たちの学園の
ことだからね!


あたしたちは
大丈夫!
自分のことは
自分でなんとか
してみせるから!
…だから…
自分だけじゃなく
自分以外のことも
全部しょいこんで
なんとかしなくちゃ
いけない人たちを
どうか…
助けてあげて!
一日も早くリベールの
治安が回復するよう
ジェニス王立学園は
遊撃士諸君に
最善の努力を
お願いする
王都で一人
頑張っている
クローゼ君を
支えるためにもな


それでは みなさん
本当に ありがとう ございました
うん
…バタバタ しちゃって ごめんね
この先も 気をつけて
みんなにも よろしく 言っといてね
な… なあ
問題が全部 片付いたらさ
また学園に 顔出せよな!
そん時は… クローゼも 交えて
学食で パーティと いこう!
それ いいわね ハンスくん
なんなら 学園祭の 劇のメンバーも みんな呼んで パーッとさ!
だろ!?
な!?
ヨシュア!


いや…
僕は…
……
…そうか…
…みんなと一緒より ふたりっきりで 話し合いたいってか
てれ てれ
は?
やっぱり 俺と同室で 暮らした日々が 忘れられないんだなぁ
しょうがない 奴だな
わかった! わかった!
言いたいことが あるなら いつでも聞いて やるからさ!
その… ハンス…
…それに
そんなこと したら
何かが変わる わけでも ないだろう?
何を 聞こうが 聞くまいが
変わるとは 思えない けどな


俺と
おまえが
ダチってことはさ
なによー
単なるパーティじゃ興が乗らないって？
それなら劇の衣装を着て仮装パーティってのはどう!?
おぉー
あ！ナイスかも！
確かに騎士と姫が揃うんだったらそれくらいやんなきゃ面白くないわよね！
ナイスかもじゃないってば…
……でも
そのために僕たちもこれまで以上に頑張らないといけないね
もちのロンよ！
結社の好きになんかさせるもんですか！


みんなもあと少しだけ踏んばってね！
おうよ！
あたしたちも絶対なんとかしてみせるから！
おう！
頼んだぞ!!
次回に続く


FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
『空の軌跡』が始まる——
もうひとつの
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！　©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!


英雄伝説 空の軌跡SC 4
ソラノキセキSC
～絆の在り処～
結社《身喰らう蛇》に囚われたエステル。脱出を試みたエステルだったが、《グロリアス》の強固な守りの前に再びピンチに陥る。そこに現れたのは、これまで行方をくらましていたヨシュアであった……。運命に導かれたふたりが再び巡り会う、誰もが待ち焦がれた瞬間を描く第4巻！
やっとあたしは、ヨシュアに届くことができた。
著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム
定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3156-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©KITSUTSUKI SHINKI　©2018 FIELD-Y

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『零の軌跡：改』と『碧の軌跡：改』のオリジナルPS4テーマを配信！

「英雄伝説 碧の軌跡:改」ダウンロード版発売を記念して、6月1日（月）より主要キャラクターをモチーフにしたオリジナルPS4テーマを配信。また、好評発売中の『英雄伝説 零の軌跡：改』からも新たにノエル、ダドリーをモチーフにしたオリジナル PS4 テーマが 6 月 1 日（月）より配信されます！
※それぞれのテーマでは、専用の BGM が使用されています。

《アイテム名》
「零の軌跡：改」ノエルのテーマ
「零の軌跡：改」ダドリーのテーマ
「碧の軌跡：改」ティオのテーマ
「碧の軌跡：改」ランディのテーマ
「碧の軌跡：改」ワジのテーマ
「碧の軌跡：改」リーシャのテーマ
「碧の軌跡：改」アリアンロードのテーマ

■税込価格
各150円

ノエルのテーマ



ダドリーのテーマ



ティオのテーマ



ランディのテーマ



ワジのテーマ



リーシャのテーマ



アリアンロードのテーマ



■テーマ紹介ページ
https://www.falcom.co.jp/zeroao/#ps4-theme

『ファルコムショップ』より新作グッズのお知らせ！

ゆるみっしぃのむにむにぷちぷちビーズキーホルダー！

ゆるみっしぃ セプチプチウムキーホルダー

カラーは、軌跡シリーズおなじみの七耀石（セプチウム）になぞって、「地（オレンジ）」「水（スカイブルー）」「火（ピンク）」「風（グリーン）」「時（濃グレー）」「空（イエロー）」「幻（ライトグレー）」の７色展開！



本体サイズ:
約W50mm×H70mm
発売日:5月20日
価格:690円（税抜）

ゆるみっしぃのゆるふわチャーム

ゆるみっしぃと いつでもどこでもいっしょ♪

サイズは足から耳まで約10cm。カバンにくっつけたり、部屋に飾ったり。ゆるっとみっしぃが癒しをお届け！





発売日:5月20日
価格:1,000円（税抜）

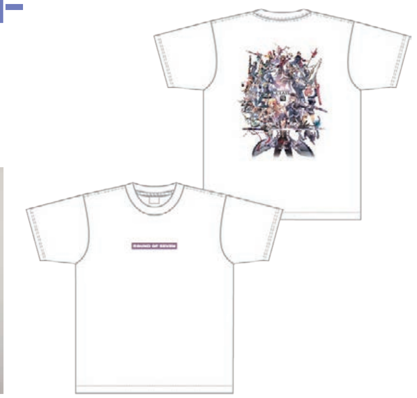
閃の軌跡Tシャツ-ROUND OF SEVEN-

「閃の軌跡シリーズ」のキャラクターたちの集合イラストをBACKにデザイン！
FRONTには、前を開けてパーカーをはおると胸元にちらっと見えるように「ROUND OF SEVEN」の文字を配置。
S・M・L・XLの４サイズ展開。

■ファルコムショップ
https://falcom.shop/







発売日:5月20日
価格:3,500円（税抜）

ZLONGAMEが開発および運営を行うスマートフォン用シミュレーションRPG『ラングリッサー モバイル』×「英雄伝説 空の軌跡」のコラボレーション再び！





■【イベント召喚】ピックアップ召喚：遊撃士参上
『空の軌跡』コラボ召喚復刻！
SSR 英雄エステル、ヨシュアの召喚確率が大幅アップ！

■【秘境イベントー時空の軌跡 FC（復刻）】
時空のアークが輝き交わる時、「空の軌跡」から
彼らが再びエルサリア大陸にやってくる！
イベント期間中、「時空の軌跡 FC」クエストをクリアすることで
ポイントが手に入り、様々なアイテムと交換できます。
目玉報酬は SR 英雄「クローゼ」、限定アイコンフレーム「白き花の恋」！

■開催期間
2020年5月19日(火)12:00~2020年6月2日(火)9:00

5月の新／衣装替えキャラクターをチェック！

6月の新規衣装替えキャラクター＆新規登場キャラクターは？



THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
今月も引き続き「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ」から新キャラクターとしてアッシュが参戦！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj



アッシュ・カーバイド

粗野で猛々しいが、あらゆる分野において並外れた才能を持つスラム育ちの不良青年。《第Ⅱ分校》では《Ⅷ組》に在籍していたが途中から《Ⅶ組》へ移籍となり、リィンやクラスメイトの影響を受けながら己の進む道を見出そうとしていた。そんな中、帝国の忌まわしき“呪い”が暴走したことで皇帝ユーゲントⅢ世襲撃という大事件を引き起こし、身柄を拘束されてしまう。《第Ⅱ分校》を離れたオーレリア将軍率いる《ヴァイスラント決起軍》によって救出されたようだが、その後の足取りは掴めていない。



花嫁・トワ

まるで森の妖精⁉　トワがジューンブライドに先駆けて花嫁姿となって登場！　純白ではなくグリーンの意匠だが、学生時代から馴染みのある色だけに、よく似合っている。

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

『創の軌跡』の発売を記念して

『軌跡』シリーズの原点を振り返る！

英雄伝説 空の軌跡1 ～消えた飛行客船～

第5回



©MIYABI HASEGAWA , WADARCO

リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報

好評発売中

著　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　価:1,200円(税別)

「なるほど……大変でしたわね……」

「市長さんが助けだしてくれて助かったわ」

シェラザードが頭を下げた。

市長邸のダイニングで遅い夕食をとりながら、エステルたちは、廃鉱山を探索しての飛行船

の発見と、その後のモルガン将軍に捕まった経緯を報告した。
茹でたてのパスタをくるくるとフォークで巻き取りながら、エステルも言葉を添える。
「ホント。あのままだったら、いつまでも牢屋のなかだったかも」
「僕たちの言うことを全然聞いてくれなかったですからね……」
ヨシュアが言った。
「まったく失礼しちゃう。あのガンコ将軍ったら。むぐ。おみず一杯飲ませてくれないんだもふ。もうはらへこふぁっふぁ〜〜〜もぐ」
「エステル、食べてからしゃべろうよ」
「ふぁっへ！」
「だって、じゃないよ」
「はんひひふりふぁから」
「半日くらい食べなくたって死なないってば」
「……あんたたちよく会話が繋がるわね」
じとっとした目でシェラザードが見ている。
「まあまあ。ゆっくり食べてくださいませ。お代わりもありますから。リラ、こちらにお茶を」
「はい。お嬢様」
シェラザードが食べ終わったのを見て、すかさずメイベル市長が命じる。

（ホント、気が利く人だな〜〜〜）
エステルは内心で感心してしまう。
さすがボースの名市長だ。
「ボクは、できればワインを一杯、所望したいところだね」
「あら。これは失礼を。リラ、こちらにはワインを」
「はい。お嬢様」
（そして、コイツは相変わらず空気を読まないわよね〜〜〜）
エステルはさっさと夕食を食べ終わっただけでなく、ずうずうしくもお酒まで注文した青年を見つめた。
市長の前にいるのは実はエステルたち三人だけではない。
帝国からやってきた自称・吟遊詩人のオリビエがいる。
ボースに入ったところで別れ、もう二度と会うこともないだろうと思っていたのに意外なところで再会した。
ハーケン門の地下牢で。
モルガン将軍の率いる王国軍に捕まったエステルたちは、有無を言わさずにハーケン門まで連行されてしまった。兵舎の地下にあった牢屋に叩き込まれた。
水一杯も与えてもらえずに、次の日まで放置されていたのだが、その牢屋の隣の部屋にオリ

ビエがいたのだ。
　ボースで別れたオリビエが、なぜそんなところにいたのか。それは――。
「これは……美味い！　なんというワイン！　鼻腔をくすぐる馥郁たる香り。喉元を愛撫する芳醇な味わい。《グラン＝シャリネ》の１１８３年物に勝るとも劣らない、素晴らしい逸品じゃないか！」
「あんたねー。その《グラン＝シャリネ》のなんとかをカパカパ勝手に呑んで捕まったんでしょうが！」
「１１８３年ものだよ、エステル君。ワインは一年、間違えるだけで大違いだからね。ちゃんと覚えて欲しいな。ああ、あの年の《グラン＝シャリネ》はまさしく大当たりの年だった！　だがこれも素晴らしい……」
　ワイングラスを目の高さに掲げながら、うっとりとした口調で言った。
「少しは懲りなさいよ！」
　エステルはつい突っ込んでしまった。
　そうなのだ。
　オリビエは、ボースのレストランで高価なワインを勝手に開けて呑んでしまった。そのワイン、なんと五十万ミラもするものだったという。当然ながら捕まって、ハーケン門の地下牢へと送られ、エステルたちと再会した、というわけだ。

　次の日の昼になってエステルたちは釈放された。
　エステルたちが軍に捕まったと聞き及んだメイベル市長が、わざわざハーケン門までやって来て、将軍を説得して釈放させてくれたのだ。
　そのとき、オリビエまで一緒に釈放された、なぜか。
（五十万ミラなんて損害をレストランに与えたら、ふつうはそんなに簡単に釈放なんてされないと思うんだけど……）
　そして、ボースまで一緒に帰ってきて、まだ一緒にいる……というわけだ。
「楽しんでいただければ幸いですわ。ワインは呑まれてこそですもの」
「おお！　美を解する人がここにいる！　素晴らしい！　このワインの価値が貴女にはわかるのだね」
「はい。それは《グラン＝シャリネ》の１１８３年物と一緒に競り落としたものです」
　さらっとメイベル市長が言って、さすがのオリビエも傾けていたワインを持つ手がぴたりと止まった。エステルたちも、えっと聞き耳を立てる。
「ああ……。あのレストランのオーナーもわたしなんです」
「えええええっ！」
　エステルたちはいっせいに驚いてしまった。
　巨大なボースマーケットのオーナーだけでなく、あの豪華なレストランもだったのか。どう

りで、最初の打ち合わせでエステルたちを連れて行ったわけだ。ようやくエステルたちは理解したのだった。

それで、オリビエをあっさり釈放させることができた理由もわかった。

オーナー自身が許すのならば、実質被害はなかったも同然だから。

なんだか昨日から驚くことでいっぱいだ。

エステルは思い返してしまう。

手がかりを元に廃坑を探って飛行船《リンデ号》を見つけた。

それがそもそもの始まりだ。

けれど、見つけた飛行船のなかには誰もおらず、空賊艇もなかった。乗客たちはおそらく空賊たちのアジトに連れ去られた後で、空賊たちと一緒なのだろう。

がっかりしながら飛行船から出たエステルたちを待っていたのは、再調査に来たところだった王国軍だった。モルガン将軍もエステルたちとほぼ同時にこの廃鉱山を怪しいと思ったらしい。

空賊と誤解され、軍に捕まってハーケン門に送られ牢屋に一晩閉じ込められ……。

途方に暮れていたところ、明くる日になってやってきたメイベル市長の手であっさりと釈放されることになった。

なんとも怒涛の二日間だ。

「にしても、あの石頭将軍が、市長さんと個人的な知り合いだったというだけでも驚きなのに、まさか父さんとも知り合いだったなんて……」

「彼は、父さんが軍にいたときの上司だったみたいだね」

「エステルさんのお父様カシウス・ブライトさんは、優秀な軍人だったそうですわね。退役する時、何度も引き留めたと閣下から伺ったことがありますわ」

メイベル市長が言った。

「ちょっと信じられないんだけど……あの極道オヤジがねぇ」

「しかし、そうなると。将軍の遊撃士嫌いは先生が原因かもしれないわね。目を掛けていた部下が軍をやめて遊撃士になっちゃったわけだから」

「なんかそれっぽいですね」

シェラザードの推測にヨシュアが同意した。

「じゃ、あたしたちが苦労してるのって、父さんのせい？」

「そうなるね」

「やっぱり、極道オヤジじゃないの！」

「まあまあ」

ヨシュアに宥められて、エステルはとりあえず数を数えて落ち着いた。エステルが落ち着いたのを見てから、メイベル市長が口を開く。

「実は、ひとつ新たなご報告があります」
「報告？」
「昨晩、市の南の地区で大規模な強盗事件があったのです。武器商会、導力器工房を始め、何軒かの民家が被害に遭いました」
　エステルたちは息を呑んだ。
「やっぱり空賊たちの……？」
「おそらく」
「それって、大変じゃない⁉」
　エステルの言葉に、市長が重々しく頷いた。
「この件に関してはすでに軍も動いています。ですが……あまり期待しないほうがいいでしょう」
　メイベルの口調に含むものを感じて、エステルは聞き咎めた。
「どうして？」
「エステルさんたちがラヴェンヌ村に向かってすぐ、まるで申し合わせたように、王国軍はあのあたりの調査を再開したのです」
「……それが？」
　エステルは首を傾げた。何を言いたいのかわからない。

　すぐに察したのはヨシュアとシェラザードだった。
「なるほど。それで、あそこに《リンデ号》だけ残されていて、空賊たちの跡が何も残っていなかった理由が説明できますね」
「えっ？　えっ？　どういうこと」
「つまりね。軍の内部に空賊のスパイがいる。もしくは情報を流す協力者のような人物がいる。そういうことよ」
　シェラザードが言って、こくりとメイベル市長が頷いた。
　エステルは戸惑いを隠せずに問いかける。
「スパイ……？　えっ？　軍に？」
「そういうこと。だから、あそこは空っぽだったし、都合よく軍が現れて、僕たちを捕まえることができたってわけさ」
「えええええ⁉」

†　†　†

　ともかく調査からだ、ということになった。
　エステルたちは、強盗事件の起きたというボース市の南側の地区を調べることにした。

元々の市長からの依頼は、飛行船の消息不明事件の調査だ。
メイベル市長が事件に関心を持っているのは、《リンデ号》にボースの有力商人が乗っていたため。そして、事件のおかげで飛行船の運航が停止してしまって、貿易都市であるボースが打撃を受けているためだった。
どうやら《リンデ号》を襲ったのは空賊団カプア一家らしいとわかってきた。
そして昨夜のボース市の強盗事件も、空賊たちの仕業らしい。
ということは——
「昨夜の犯人を追えば、空賊団のアジトを突き止められる可能性があるってことよね！」
エステルが自分の推測を口にすると、ヨシュアもシェラザードも頷いた。
「では、エステル君、さっそく調べに行こうではないか」
「そうね。まずは、襲われたっていう導力器工房からかな？　って、なんで、あんたも付いてきてんのよ！」
エステルはオリビエを睨んだ。
釈放された経緯を考えれば市長邸まで同席していたのはわからないでもないが、それ以上は一緒にいる理由はないはずだった。
「キミたちにお礼をしたくてね。あそこでキミたちを助けに市長が来てくれなければ、ボクは今でも檻のなか。そのまま帝国に送り返されていたかもしれない」

そのほうが良かったんじゃ、と、ちらりとエステルは思ってしまう。
「こう見えても、ボクは義理堅いんだよ。それに、銃と魔法にはいささか自信があってね」
言いながら、外套の内側から小さな導力銃を取り出してみせた。
「嘘くさ〜〜〜」
エステルは半目でじっとりと見てしまう。銃だけならまだしも、魔法まで使いこなせるとか、信じられない。
「信じてもらえないとは、心外だ……。ほら、こっちがボクの導力器」
魔法を導く神秘の機械を見せつけてくる。
七耀石の欠片を埋め込んだ手のひらに載るほどの円盤——導力器は、個人ごとに調整されたもので、初期化しないかぎり決して他人のものを使うことはできない。
オリビエの導力器はエステルの見たことがないタイプのものだった。
おそらく帝国製なのだろう。
「……遊撃士じゃないのに、そんなの持ってるなんて」
「それは不思議じゃないわよ。導力器は遊撃士専門ってわけじゃないもの。とくに、危険な地を歩く旅人には必須と言えるわね。使いこなせれば、だけど」
シェラザードが言った。
「でもぉ、なんか嘘くさいんですけど」

「まあ、いいでしょ。今は少しでも人手が欲しいし。軍は当てにできないもの」
あっさりとシェラザードが同行を認めてしまう。
「シェ、シェラ姉！」
「その代り、少しでも足手まといになるようだったら、外れてもらうわよ？」
「決して失望させたりしないから、安心してくれたまえ」
砂を吐けるほど気障な言い草だった。
頭が痛い。
だから――。
エステルは気がつかなかったのだ。
メイベル市長が、酔狂だけでワイン泥棒を釈放させるほど甘い性格ではないことや、人を見る目が確かなシェラザードが、あっさり同行を承知したこと――つまり、オリビエ・レンハイムという男に、こっそりとかなりの関心を払っていたことに……。
「じゃあ、武器商会から聞き込みに行ってみよう」
ヨシュアが促した。
「なんか釈然としないんですけど……」
「ほら、行くわよ、エステル！」
シェラザードに促されて、エステルは不承不承だが歩き始める。

ボース市の南にある武器商会から調べた。軍に納める武器や防具の製造を扱っている店だ。遊撃士たちが自らの得物を探しに行くところでもある。その店からは、最新式の武器が強盗たちによって奪われていた。
次は導力器の工房。そこでは七耀石の結晶と個人調整される前の導力器がいくつか盗まれていた。
どちらの店でも、数名の男たちがいきなり押し入ってきて、兵士たちが駆けつける前に逃げたという。
確かに強盗事件だが……被害総額そのものはたいしたことがなさそうだ。
「なんてゆーか……セコくない？」
エステルのつぶやきを聞き取ったヨシュアも頷いた。
「確かにね。定期船を乗っ取って王家を相手に身代金を要求するような奴らの仕業には見えないな」
ボース市には、北の地区にボースマーケットという巨大な市場もあるのに、狙ったのは南にある小さな店だけなのだ。
「まあ、前からボース地方を荒らしまわっていたっていう噂の空賊団らしい事件だと言えるかもね」
シェラザードも同意する。

つまり、それは飛行船のハイジャックだけが例外に見えるということだった。そのことが何を意味するかまではわからないけれど。

導力器工房を出たところで、エステルたちを引きとめる声がかかった。

「おい、お前たち！　そこの遊撃士ども！」

声に振り返ると、軍の兵士、いや制服からすると士官が立っていた。背後に部下らしき兵士を何人も引きつれている。横柄な物腰と言葉に、エステルはぶっきらぼうに返事をしてしまう。

「なあに？」

「ふん。一言、忠告しようと思ってな。市長代理らしいが、お前たちはあくまで民間人だ。我々の調査をウロウロして邪魔しないでもらおう」

「あ、あんですって～⁉」

「それでは、忠告というよりも警告だと思いますが……？」

「分をわきまえろと言っているのだ。それともまた牢屋に入りたいか？」

「むっ……」

部下の前だからか、ヨシュアの皮肉にもひるまない。さすがにかちんときた。

「エステル、落ち着いて」

「わ、わかってるわよ」

（でもね、ヨシュア）

エステルは口を閉じ、深呼吸して落ち着いてみせた。

だが、エステルが静かになるのと入れ替わるように隣の二人が口を開く。

「気にしないのよ、エステル。どうせ、吠えてるだけで何もできないわ」

「虎の威を借りる狐というわけだね。やれやれ無粋なことだ」

「な、なにぃ⁉」

「シェ、シェラさん、オリビエさん……」

ヨシュアが頬を引きつらせた。

（ほらね。あたしばっかり抑えてもダメだってば）

シェラザードも、決して理不尽なことを言われて黙っているタイプではないのである。それはどうやらオリビエも同じようだった。

「貴様ら、軍を愚弄するか……！」

「してないしてない」

ひらひらと顔の前でエステルは手を振る。愚弄なんてしてない、二人ともからかってるだけだ。

士官の顔が真っ赤になっていた。

「……何をやっているのかね？」

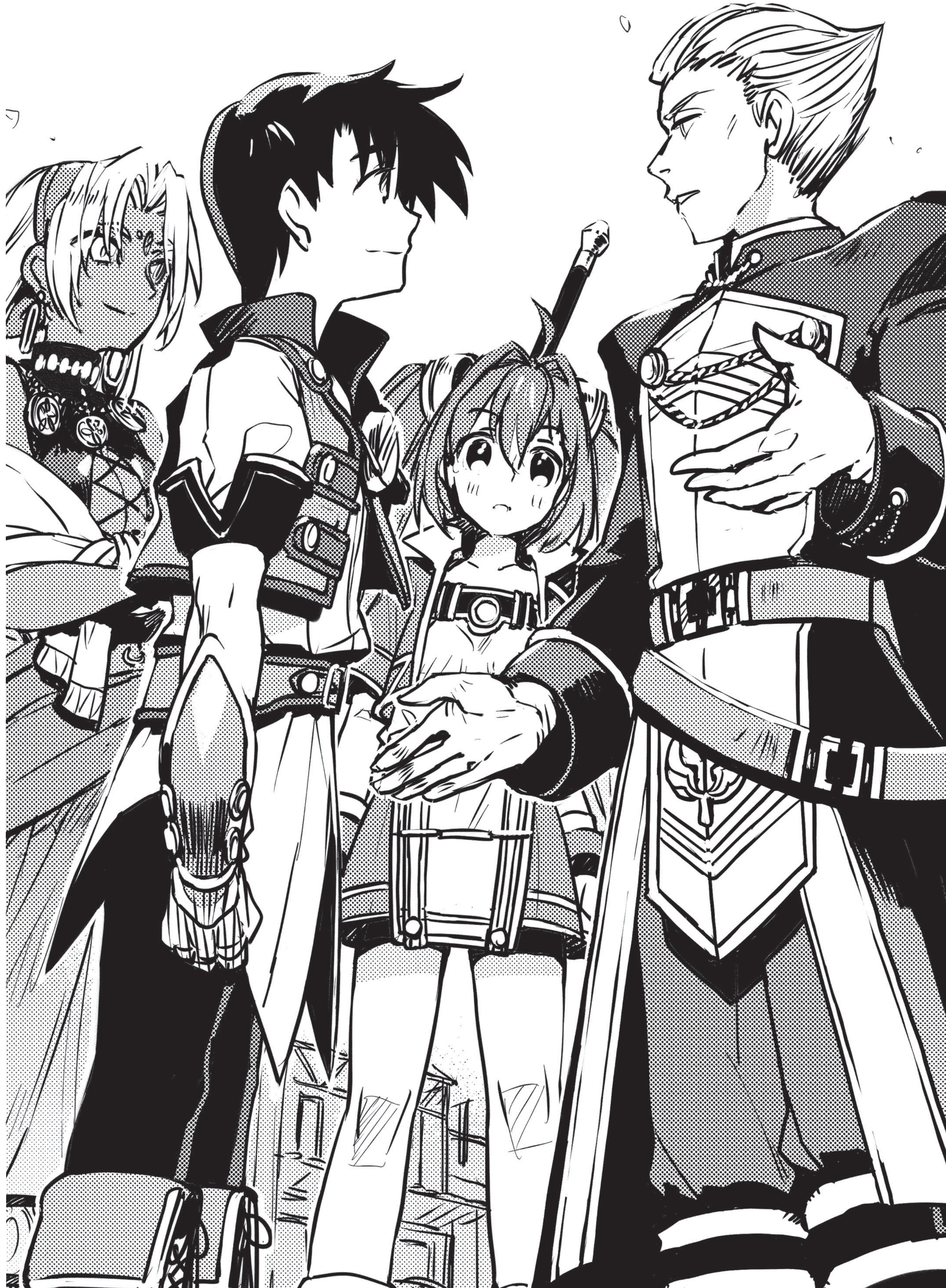
それは、決して怒鳴り散らすような大声ではなくて、深い森のなかの湖を思い出させる、落

ち着いた静かな声だった。
背後から掛けられたその声に、兵士の真っ赤だった顔からさあっと血の気が引いた。

† † †

「こ、これは大佐どの！」
現れたのは金の前髪を油で撫でつけて整えた、三十代と思しき男だ。
黒い軍服の胸元を金の鎖で飾っている。広い肩幅を強調するかのように胸を張り、背筋を伸ばして立っていた。
「栄えある王国軍の軍人が善良な一般市民を脅す場面に遭遇するとはな……嘆かわしい」
エステルたちに絡んできた士官を問いただした。
「こいつらはただの民間人ではありません！ 遊撃士どもであります！」
「ほう、そうだったのか……。だがそれならば尚更だろう。軍と遊撃士協会は協力関係にあるはずだが？」
「じ、自分は、将軍閣下の意を汲みまして……」
その言葉に大佐と呼ばれた男は、やれやれとため息をついた。
「モルガン将軍にも困ったものだ。ふむ。では、この場は私が預かろう。将軍閣下には私から

後で執り成しておく。それでどうだ？ 何か問題があるかな」
「い、いえ。……そういうことであれば」
悔しそうな顔を隠せずに、それでも部下を引き連れて去っていった。
「さて。遊撃士協会の諸君。軍の人間が失礼をしたね。謹んで謝罪をさせてもらうよ」
「これはどうもご丁寧に。こっちもちょっと挑発的だったわ。お互い様ってことにしておきましょう」
シェラザードが代表して言った。
「そう言ってくれると助かる。軍と協会（ギルド）は協力関係にある。今回の事件に関しても、互いに補いあって調査を進めるべきだと私は考えているのだ。君たちには期待しているのだよ」
「失望させないように頑張らせてもらうわ」
互いに腹を探り合いつつ、表面は紳士的という、大人な会話が繰り広げられていた。
それでも、横柄なだけだった軍人に比べると、まともに見える。
「な、なんか、マトモそう……」
「誰なんだろう？」
エステルとヨシュアがこそこそとシェラザードの背中に隠れて会話をしていると、一度だけ、大佐がエステルたちを見た。静かな瞳で見つめられて、エステルは自分の心の奥まで探られている気がした。



（ホント……誰だろう？）
「大佐……そろそろお時間ですが」
背後に控えていた女性士官が告げた。
「おお、そうか。それでは諸君、これで失礼させてもらうよ」
そう言って去って行こうとしたが、歩き始めてから振り返った。
「そういえば、まだ名乗っていなかったな。王国軍大佐、リシャールという。何かあったら遠慮なく連絡してくれたまえ」
その後は振り返らず、お付きの女性士官とともに去った。
「リシャール大佐って、どこかで聞いたことあるような」
「ナイアルさんが言ってた人だね。できたばかりの王国軍情報部を率いる、キレ者の若手将校だっていう」
「あ、そうか！」
（あれが、リシャール大佐……なんか底の知れない人……）
「フッ……。彼はなかなかの傑物とみた。硬派な美を感じるよ」
相変わらずのオリビエだった。
「無論、ボクにはまだまだ叶わないがね」
最後に余計なひとことを付けたすところもオリビエだ。

まあ仕方ない。オリビエだから。エステルたちもそろそろそれがわかってきている。
時刻は午後になりかけていた。
「どうしますか、シェラさん」
「んー。まだ何もわかってないのよねぇ。でも、襲われた店はひととおり調べちゃったし、どうしようかしら」
「シェラ姉、あそこの家はまだ調べてないよね?」
エステルは一軒の家を指さした。工房から見て、はす向かいにあたる家だ。立ち入り禁止の綱が張られているところを見ると、あそこも軍の調査対象となっているようだが……。
しかし、ごくふつうの民家である。
「話を聞いてみようか」
ヨシュアが言って、念のためにエステルたちはその家の住人に話を聞いた。
家にいたのは、セシルという名の老女で、彼女の話に寄れば、偶然にも玄関から出たところを、工房から出てきた空賊たちと鉢合わせたのだそうだ。
「そんな夜遅くに出歩こうとしていたんですか?」
シェラザードが心配そうに尋ねると、セシル婆さんは笑いながら答えた。
「違う違う。亭主が帰ってきたと思ったんだよ。うちの宿六は釣り好きでね。帰りが真夜中なんてことも良くあるのさ。物音がしたんで、扉を開けて怒鳴りつけてやったんだ」
「まあ」
「そしたら泥棒だったってわけ。幸い、そのまま逃げてったんだけどさ。こっちは、びっくりして心臓が止まるかと思ったよ。ああ、怖かった」
胸を押さえて言うのだが、からからと笑いながらだから、あまり説得力がない。
なるほど、この家に押し入ったというわけではなかったようだが、お婆さんに怒鳴られただけで逃げたとなると、ますますもって――。
「情けないやつらねー」
お茶でも飲んでおいきと、テーブルに用意してくれているセシル婆さんに背を向け、小声でエステルたちは感想を言い合った。
「まあね。しかし、困ったな。どうやら僕たちが出会った空賊たちの一味らしいのは確かだけれど、行き先を示す手がかりが見つからない」
「フッ……逃げ足だけは早いというわけかな。自前の飛行船を持っているのならばそれも道理だね。困ったものだ。だが……困り顔のヨシュア君も美しいから、それはそれで捨てがたい」
「そっちの世迷言はともかく――」
「ヒドイ……ぐっすん」
「泣き真似しないでってば。ええい、うっとおしいわね。ともかく――このままじゃ、後を追えないよ。どうしよう」

「うん……」
　ヨシュアが少し考えこんでから口を開く。
「彼らが襲ったのは武器商会と導力器工房だよね。お婆さんの証言から類推すると、最初に襲われたのが武器商会で次が工房になる。このふたつの位置関係を見ると、武器商会のほうが南にあるよね」
　エステルは頭のなかでボースの地図を思い浮かべる。
　確かに武器商会のほうが南で工房が北にある。さらに北がセシル婆さんの家だった。
「ということは、おそらく空賊たちは街の南の門から侵入したんだと思う」
「南から順番に武器屋から工房へって動いて、お婆さんの家のトコで見つかって逃げだしたのね。でも、それで何かわかるの？」
　ヨシュアは自分の考えを自分で確かめるようにゆっくりと言葉を紡ぐ。
「軍の捜索隊はラヴェンヌ村を含めて、ボース市の北側を熱心に調べているだろう？」
「うん。《リンデ号》が見つかったのが北の山だし、それにヨシュアが、あいつらのアジトは、山岳や峡谷のような場所にあるに違いないって言ったじゃない。大きな山があるのはリベール王国の北側だけだし」
「でも、僕たちは軍に内通者がいるに違いないって思ってる。だとすれば、軍がボース市の北側を調べていることを知っているはずだ。アジトがあるにしても、目立つような行動を北では

しないだろう、と思ってさ……」
　シェラザードが頷いた。
「そうね。ヨシュアの言うとおりだと思うわ」
「となると今はアジトから離れた場所で仕事をしたがると思う。ボースの南側に彼らはいるにちがいない。具体的に言えばアンセル新道のほうだ。だからこそ彼らは南からやってきた」
「でも、見つかったときには北に逃げたんでしょ？」
　そう指摘すると、ヨシュアはちらりと老夫人のほうを見ながら、
「セシルさんに見つかったのはおそらく予想外のことだったはずで、だから、とっさにいつものように逃げてしまったんじゃないかな？」
「んー」
　エステルはヨシュアの頭の良さに舌を巻きつつも、納得できないところを口にする。
「でも、ここから南にあるのってヴァレリア湖だけだよ。そりゃ、湖の向こう側まで渡れば、王都もツァイスもあるけど、そっちじゃ空賊の話なんて出てないんでしょ？」
「南にもアジトがあるとは言ってないよ。ただ、軍と鉢合わせないように、彼らが南に小さな拠点をもっている可能性があるって言ってるだけさ。だから、怪しい奴らを探すなら、南のアンセル新道のほうを探したほうがいいんじゃないかって——」
「なんじゃ、なんか難しい話をしとるな？」

　ひょいとヨシュアの後ろから老人が顔を覗かせた。
「あんた！」
　セシル婆さんが叫んだ。
「おう。今、帰ったぞ〜〜〜」
「このスットコドッコイ！」
　セシル婆さんが目を吊り上げて怒鳴った。

† † †

「な、なんだ、おい。お客様の前でいきなり大声を出してやがって。失礼じゃねえかよ」
「失礼なのはあんただよ！　まったくこの大変なときに！」
「お、おう⁉　どうしたんでぃ」
　帰ってきていきなり妻に怒鳴られ、老人は目を白黒させている。
　のほほんとした夫に、セシル婆さんが昨夜からの強盗事件について説明した。
「はあ、なるほどなぁ」
「お爺さんは、どちらまで釣りに行っていたんですか？」
　背中の釣り竿を見て、エステルはなんの気なしに尋ねた。さして理由があったわけではない。

　元々エステルも釣り好きだから気になっただけだ。
「おう、嬢ちゃんも釣り好きかい？　オレが行ってたのはヴァレリア湖だよ。オロショを釣りに行ったんだ。ボウズだったけどな」
「へえ……あそこオロショが釣れるんだ……ヴァレリア湖？　ねえねえ。お爺さん、じゃあ、そのとき何か変な奴らとか見なかった？」
　答えは期待していなかった。
　事実、老人はとくに怪しい奴など見なかったと答えたのだ。
　ただ——。
「そういや……俺の釣り仲間が幽霊を見たって言ってたな」
「ゆ、幽霊⁉」
　ぎくりとエステルは身をすくませる。
　それまで黙って聞いていたシェラザードが身を乗り出してきた。
「気になる話ね。詳しく聞かせてくれない？」
「いいけど。オレも又聞きだぜ？　湖畔にオレたちがいつも泊ってる宿屋があるんだけどよ。そこで夜遅くに湖のほとりを歩いている若い男女を見たんだとさ」
「……それだけ？」
　少々気の抜けた顔になってシェラザードが尋ねた。

「おう」
「なーんだ。それって、宿の泊まり客じゃないの？」
　エステルもほっとしてしまう。
「いいや。それはないぜ。だって、宿にそのとき泊ってたのは、そいつひとりだけだったっていうからな。しかも、その男女だけどな。とうていそんな場所にいるはずのない二人連れだったんだとさ」
「いるはずのない？　どうしてそんなことがわかるんです？」
　ヨシュアが訊いた。
「そりゃおめえ、女のほうが学生だったんだってさ」
「学生……制服を着てたってことですか？」
「おう。ほら、なんていったっけか、ルーアンにあるあの名門学校だよ」
　エステルの脳裏に光が閃いた。
「ジェニス王立学園……」
「そう、それだ！　そんな名門の女の子が真夜中に湖のほとりに男と二人っきりなんて、ありえねえだろ？　だから幽霊だって、あいつは言うのさ」
「フッ……ご主人、その友人の推測はまだまだ甘いと言わざるを得ないな。駆け落ち、という可能性があるだろう？　そう、駆け落ち！　道ゆかぬ恋の劇的な結末！　いわゆるひとつの愛

の逃避行というやつさ。二人は身分違いの恋に落ちたのだ！」
　頼みもしないのに、めい推理がきた。迷う方のだが。
「名門校の女生徒と教師の禁じられた恋だよ！　帝国歌劇にはよくあるパターンだ。ああ、エステル君。そんな顔をしなくてもわかってるよ。もちろん、幽霊かもしれないね。二人は、逃避行の末にそのヴァレリア湖畔で命を絶ったわけだ。だが、未練を残した二人の魂は現世に留まり、幽霊となって今も彷徨っているのだ。甘く、悲しい恋の苦しみを伝えるためにね！」
「という妄想話は置いておいて」
　エステルはざっくりとオリビエの話を切り捨てると、ヨシュアとシェラザードに目配せした。オリビエが涙目になっているが気にしない。
「ねえ、ジェニス王立学園の制服を着てるくせに、宿にも止まらずに真夜中に出歩く少女ってところで、あたしなんとなーく、思い当たるものがあるんだけど……」
「うん。僕もだ」
「一気に怪しくなってきたわね」
　三人は互いに目配せをして頷き合う。
「お爺さん、その湖畔の宿屋の名前を教えてくれない？」
　老人からヴァレリア湖畔にある宿屋の名前を聞きだした。
　せっかくセシル婆さんが用意してくれたお茶とお菓子に若干の未練を残しつつ、その足でボ

ース市の南門から出て、アンセル新道を南へと。午後も遅くなっていたが休まず歩き通す。
空に黄昏のカーテンが降りる前にヴァレリア湖が見えてきた。
「フッ……、これが《リベールの真珠》と歌われる麗しのヴァレリア湖か」
まだ青の残る空の色を映した目の前に広がる湖を見て、オリビエが言った。
ヴァレリア湖は、リベール王国の中心にある巨大な湖だ。
ロレントの五大都市は、この湖の周囲を巡る衛星のように存在している。
いちばん東の端にあるのがエステルたちの故郷のロレント。そこから左周りに『商業都市』ボース、『海港都市』ルーアン、『工房都市』ツァイスときて、『王都』グランセルへと至る。
五つの都市は互いに街道で繋がっているものの、そのすべてを徒歩で歩ききるのは楽なことではない。ヴァレリア湖というのはそれほど巨大なわけだ。
ほとんど内海と言っていい。
アンセル新道の先の、ボースから見て南、ヴァレリア湖から見れば北岸に建てられたその宿屋の名は《川蝉亭》といった。
宿の主人に訊くと、幽霊を見たという男はまだ宿泊していて、湖畔で釣りをしているという。
ロイドという名のその男に話を聞くことができた。
釣り好きだけあって、会話の端々にマニアックな釣りの話題が混ざってきたが、そのなかから辛うじて関係ありそうな部分だけをエステルは頭に叩き込む。

それは夜釣りから宿へと戻ってくる途中の出来事だったという。
「奇妙な二人組が宿の敷地から街道に出て行くのを見かけたんだよ」
「街道って……そんな真夜中にですか？」
ヨシュアが尋ねた。
「間違いない。アンセル新道に出ていったよ。てっきり宿の客だと思ってたんだが、次の日、川蝉亭の主人に訊いたら、そんな客は泊ってない、って言うんだ」
「それで幽霊じゃないかって思ったわけね」
「若い男女だったし、湖で心中したカップルかも……ってな」
「あぅぅう、や、やめてよぅ！」
「相変わらず幽霊話には弱いのねぇ」
シェラザードに呆れたように言われたが、怖いものは怖い。
「ははは。まあ、幽霊というのは冗談さ。なにしろ、彼らの話が聞こえたからね」
「えっ！」
エステルは思わず声をあげてしまった。
「幽霊の話を、ですか」
「いやだから幽霊じゃないと思ったわけさ。二日後に改めて来よう、と男のほうが、そう言ってたからね。あれは駆け落ちカップルに違いない」

「二日後……それはいつになるんですか」
　ヨシュアが問うた。
　答えが返ってくるまでのわずかな時間が、エステルたちにはとても長く感じた。
「今夜になるね」

†　†　†

　怪しい二人組が今夜にもふたたび湖畔を訪れるかもしれない。
　エステルたちの緊張はいやがうえにも高まったが、とはいえ、真夜中まではまだ時間があった。
　エステルたちは、湖畔の宿屋で思い思いにしばしの休息を取ることになった。
　西の空の地平線近くにようやく太陽が降りてきて、風に涼しいものが混じる時刻。
　黄昏に暮れる空を見ながら、エステルは釣竿を畳む。
　好きな釣りでもしていれば気が紛れると思ったのだが、どうやら神経が昂ぶっていて、うまく集中できない。
「だーめだ。今日はやめやめ！　ねえ、ヨシュア――」
　宿のテラスのほうを振り返れば、さっきまで日傘の下で本を読んでいた黒髪の少年の姿が見えない。
「あれ？」
　竿を肩に乗せて、湖の岸辺から駆け寄る。
　テーブルに乗せてあった本を手に取る。ヨシュアの読んでいたものに間違いない。エステルが湖に向き合って釣り竿と奮闘している間に、読み終えてどこかへ行ったらしい。
「声をかけてくれればいいのに……」
　なんとなく面白くない。
　竿を宿の主人に返してから、エステルはヨシュアを探してまわる。
　初めに覗いたのは食堂だった。
　シェラザードがオリビエと呑んでいた。
（そう言えば、美味しそうな冷えた果実酒があるって騒いでたっけ）
　見ると、酒の入っていたボトルが既に一本空になっている。どうやら二本目の半分というあたりのようだ。
「シェラ姉ってば、まだ日も暮れてないのに。いっくら軽いお酒でも、飲みすぎたら身体に悪いよ？」
「だーいじょうぶよぉ。うふふふふ。いやあ、あんたって、なかなかイケる口だったのね。ほらほら、遠慮しないで、どんどん呑んでいいのよぉ」

「ま、待ちたまえ。少しペースが早くないかね？　このままだと今夜の探索に支障が……」
「なにを言ってるのよぉ。こんなのジュースよ、ジュースぅ！　それともあなた、あたしの酒が呑めないってーの？」
「ちょ、ちょっと。いや、そうは言わないが。ご婦人の薦める酒を断るなんて」
「でしょおおお」
「確かに断るなんて帝国紳士の恥と言えよう！　……だが、ちょっと待たないかね？」
「待たない！　ほらほらほらぁ」
　シェラザードがグラスに注いだ果実酒をぐいぐいと押しつける。
「ひえええ……！　エ、エステル君、何とかしてくれ！」
「ゴメン、そうなったシェラ姉はあたしでも止められないの。大丈夫。シェラ姉って、どんなに酔っても潰れたことないから」
「いやあの……ボクの心配は？」
　オリビエがすがるような目でエステルを見た。
「頑張ってネ」
「うそおおお」
「ほおら、呑まんかーい。うふふふふ。あ～、なんか熱くなってきたわぁ。上着脱いじゃお！」
「おおおおおお！　エ、エステル君。彼女はいつもこうなのかね⁉」

「んー」
　上着を脱いでシャツ一枚になったシェラザードを見ながらエステルは言う。
「いつもよりもマシな方ね。さすがに仕事中だから」
「これでマシ……。ということは、もっと大胆になる可能性も……う、うむ……」
　オリビエがなんか葛藤していた。
（ホント、男の人ってわかりやすいわねー）
「ごちゃごちゃ言ってないで呑む！　呑みなさーい！」
「あ、ああ。うん。そうだね……わかった。呑もうじゃないか」
　二人をそのままにしてエステルは食堂を出た。
　まあ、放っておいても大事にはならないことはわかってる。シェラザードはあれでも抑えているのだ。
　建物を出て、宿の周りを歩く。
　崖の下、船着き場のあたりに見慣れた人影が見えた。
　桟橋の端に腰掛けて、すこしうつむき加減で湖のほうを眺めている。
「よっ、少年。こんなところで何をたそがれておるのかね？」
　崖下まで階段を降りていって、エステルは声を掛けた。
　そのままヨシュアの傍らに座りこむ。

「はは。たそがれてなんかいないけどね」
「本、置きっぱなしだったわよ」
　宿のテラスに置いていった本を渡した。
「ああ。読み終わった所でさ。目が疲れちゃったから、ちょっと休めようと思って」
「湖を眺めてたって？　……コラ」
「な、なに？」
「まーた、何かひとりで溜めこんでるでしょ？　わかるんだってば」
　エステルの不意の言葉に、ヨシュアが黙り込んだ。
「あたしじゃ父さんみたいに頼りにならないかもしれないけどさ――」
　ちょっとだけエステルは言い淀む。なんだか照れくさい。
「それでもね。一緒にいてあげられるんだから」
「……ごめん」
「ちがーう！」
　ヨシュアがびっくりして目を丸くする。
「こういうときはね。『ありがとう』でしょ？」
「はは。そうだね。……ありがとう、エステル」
「ん。ヨロシイ。じゃ、ハーモニカ一曲で手を打ってあげるわ」

「おおせのままに……『星の在り処』でいいかな？」
「うん」
　肌身離さずに持っているハーモニカをヨシュアはポケットから出した。そのまま口に当てて、静かに吹き始める。
　胸が締めつけられるような切ない音が黄昏の風に乗って流れてゆく。
　ヨシュアの好きな曲。
　エステルも大好きな曲だ。
　印象的なフレーズを繰り返しつつ、曲は静かに終わった。
「えへへ。なんだか泣けてくるよね。ハーモニカと夕焼けって合うよねえ」
「……相変わらず、何も聞かないんだね」
「話してくれる気になるまであたしからは聞かないって決めてるし。それに、五年も経ってると、なんかどーでもよくなっちゃった」
「五年……。もう、五年か。ねえ、エステル。君だけじゃない。君も父さんも……薄々気になっているだろうシェラザードさんも……。どうして何も聞かずにいられるんだい？　あの日、父さんに担ぎ込まれたボロボロで傷だらけの子どもを……得体の知れない人間なんかをどうして……どうして、君たちは受け入れてくれるんだい？」
　夕焼けを映して湖は真っ赤に燃えていた。

その赤い色も、端のほうから徐々に藍色に浸食されてゆく。急速に移り変わる湖の色を見つめながら、ヨシュアがそっと目を伏せる。
問いかけながらも、答えを聞くのを怖がっているように見えた。
「よっと」
エステルは勢いよく立ち上がると、ヨシュアにくっつくようにして立った。
「そんなの当たり前じゃない。だって――」
腰を屈めてヨシャアの耳許に向かって、夕暮れの風に流されないように、ちゃんと聞こえるように言ってやった。
「家族だもん」
一拍置いて、ヨシュアが顔をあげてエステルを見る。
「……え?」
「家族だからだよ。それに、得体の知れないっていうけどさ。あたし、ヨシュアのこといっぱい知ってる。本が好きで。武器オタクで――なんか、新しい武器とか手に入れては使ってるし、要領がよくて人当たりもいいけど、他人行儀で。ちょっと警戒心強いのよね」
「ちょ、ちょっと」
「でも……面倒見は良くて。実はかなりの寂しがり屋」
ヨシュアは黙ってしまった。

「もちろん何もかも知ってるなんて言わないよ。でも、それを言ったら、あたし、父さんの過去だって知らないのよね。旅に出てからそれを実感してる。でもだからって、あたし父さんを、正体不明の不審人物……に見えるときも時々あるけど」
「こらこら」
「あは！　冗談だってば。でも、家族であることに変わりないじゃない？　たぶんそれは、あたしが肌で感じられる部分を良く知っていて、それで充分だって思っているから。ヨシュアだって同じよ」
「……君には敵わないな」
太陽が地平線の彼方に隠れて、薄闇があたりを覆い始めた。
「ねえ、エステル……。今回の事件、絶対に解決しよう。父さんが空賊たちに捕まっているかどうかわからないけれど、それでも僕たちの手で、絶対に」
「モチのロンよ！」
きっぱりと言った。
薄闇に隠れてヨシュアの顔はもう見えない。
それでもなんとなく笑顔になってくれた気がしたのだ。
「宿屋に戻ろうか」
ヨシュアが言った。

「うん。しっかりゴハン食べて、真夜中に備えなくちゃね！」

第七幕　霧降り峡谷

　ぬばたまの空に星が輝いている。
　時刻はすっかり真夜中になっていた。
　街道に面した側の宿屋の二階に陣取ったエステルたち——エステルとヨシュアとシェラザードは闇の向こうを睨んで息を潜めていた。当然ながら明かりは点けていない。
　オリビエはいない。酔い潰されて、ベッドでひっくり返ったままだ。
　空賊たちと戦いになる可能性もあるからと、そのままにしておこうということになった。
　当のシェラザードのほうは、もうすっかり素面（しらふ）に戻っていたが。
「ところで、エステル。ここで問題よ」
「えっ、なにシェラ姉、いきなり」
「釣り人の見た二人組……彼らは何故ここに戻ってくるのかしら？」
「ここにって、宿屋にってこと？」
「宿屋とは限らないわ。この場所にってことよ」
　言われてエステルは黙り込んだ。それは正直、考えたことがなかった。ただ、釣りをしてい

た男の話を鵜呑みにしていただけなのだ。二人組がそう言っていた、と。
「つまりシェラさんは、ここには何か他にない特殊性があるって言いたいんですね？」
　ヨシュアが言った。
（特殊性って？）
「まあそうね。……来たわ！」
　鋭く言って、シェラザードは口を閉じた。
　闇を凝らしてエステルは見つめる。かすかな影が見えた。
　こんな真夜中だというのに、明かりも点けずに、街道の方から誰かがやってくる。
　シェラザードが指で階段の下を差した。
　降りよう、という合図。
　エステルは黙って頷くと、音を立てずに下のテラスへと降りて、街道から続く道の脇にある藪へと身体を隠した。ヨシュアとシェラザードも間を置かずに近くに潜む。
　しばらく待っていると、二人組がすぐ脇までやってきた。どうやらここまでは気づかれていない。
　声が聞こえてくる。
　小声で話しているようだが、これだけあたりが静かだと、エステルたちにも辛うじて聞くことができた。

「あーあ、昼間とかだったら、ここで食事とか出来るのにサ」
「無茶言うなよ。俺たちゃお尋ね者なんだぞ？　ほれ、さっさと行くぞ」
「待ってよ、キール兄」
　そう言って、女のほうが小走りになって男の背を追いかけた。エステルたちの脇を通り過ぎる。
（キールって確か空賊の男のほうの名前よね……）
　そして、あの女の声は、間違いなくジョゼットと名乗った女の子だ。そっと藪から目だけだして窺う。湖畔の方へと降りていく二人組の背中が見えた。ジョゼットはもうジェニス王立学園の制服は着ていないようだ。
「桟橋のほうに降りていくみたいですね」
「やっぱりね」
　シェラザードが言った。まるで予想していたと言わんばかり。
　いや――予想していたのだ。
「ひょっとしてシェラ姉の言ってた、特別な場所って……桟橋？」
　にっと闇のなかでシェラザードが微笑んだ。
「正解。実はヴァレリア湖の北側で船を着けられる場所ってそんなにないのよね」
「ということは……」

「まあ、追えばわかるわ。気付かれないように近づくわよ」
階段を降りた。
そこは夕方にヨシュアを追って通った道だ。エステルは何だか不思議な感じがした。
湖に突きだした桟橋の上に男と女の二人組が立っている。
彼らから見えないよう柵の後ろに身を潜めた。ここなら声が聞こえる。
「さすがにまだ来てないか」
男のほう——キールが言った。
どうやら誰かを待っているようだ。
「ボク、あいつらキラーイ。偉そうだし……ちょっと恐いんだもん」
ジョゼットが足下に転がっていた小石を蹴っ飛ばしながら言った。ぽちゃんと湖に落ちて小さな波紋を作る。
「確かにな。得体のしれん連中ではある。だがドルン兄貴の命令だからな」
「……ねえ、キール兄」
ジョゼットが傍らの兄を見上げる。
「ドルン兄、最近おかしくない？　なんか、ヘンだって思うんだ。定期船を乗っ取って身代金を要求するなんて、ドルン兄らしくないよ……」
「やりすぎだって言いたいのか……？　なあ……。お前、故郷に帰るか？」
「なっ⁉　なに言ってんのサ！」
「あそこは暮らしやすい場所だ。リベールよりは、ちと寒いけどな。あそこで暮らすなら、お前だってこんな危ない橋を渡らずに……」
「それ以上言ったら、キール兄でも怒るよ。だいたいボクがいなかったら、誰が兄貴たちの面倒見るのサ！」
うっと男のほうが詰まる。
「ま、それはそれとして。確かにドルン兄貴の様子が、ちょいと変というのは同感だ」
「やっぱりさ……アイツが来てからじゃないの？」
「ああ……連中を紹介したのもヤツだしな……」
そこで二人は話をやめた。
湖の向こうから音が近づいてきたのだ。
導力を駆動機関とした小型のボートの音だった。ドッドッドッと近づいてくる。
静寂のなかだと、やけに音が響いた。
ボートが姿を見せた。
音が消えた。船が桟橋に横付けされる。
全身を黒装束で纏うという奇怪な格好の男がひらりと桟橋に飛び乗ってくる。
ボートのほうには、制服のようなものを着た男が二人残っていた。なんとなく軍人っぽいな

とエステルは思った。背筋がぴんと伸びて不動の姿勢で立っている。
「相変わらず時間通りじゃねえか」
「時間厳守が我々の習いでね」
キールが黒装束の男に向かって言い、抑揚を抑えた声が返ってきた。
「で、どうなってる？」
これが本題だとばかりに空賊の青年は黒装束に向かって問い掛けた。

† † †

「陛下が動かれた」
そのひとことに、キールとジョゼットの二人だけでなく、陰で様子を窺っていたエステルたちにも緊張が走った。
「ご自分の資産から身代金を拠出されるおつもりだ」
「そ、そうか……」
答えるキールのほうが声が震えていた。
やりとりを聞いていたエステルたちにも、陛下というのがリベール王国の女王陛下であること、身代金というのが空賊たちに攫（さら）われた飛行船の人質たちのためのものだということがわか

る。
それにしても、王家の事情をそこまで詳しく知っているこの黒装束はいったい何者なのか。
エステルは傍らのシェラザードの顔を窺った。
どうする？
声に出さずに唇だけ動かす。
指先でちょいちょいと空賊二人組と黒装束たちをつつく。突入するか？　という意味だ。
シェラザードが首を横に振った。
だめ、の返答。
シェラザードが指で街道のほうを差した。
あっちに行くぞ、という合図だ。
理由はわからない。だが、ここはシェラザードの指示に従うべきだとエステルは思った。《銀閃のシェラザード》は歴戦の遊撃士なのだ。
腰を浮かしたところで、ヨシュアがまだ桟橋を見つめたままなのに気付いた。
行くわよ、とぽんと肩を叩く。
びくっとヨシュアが身体をすくませた。慌てて自分で口を塞いでいる。声を出さずに済んだのが信じられないほどだった。
エステルを見つめて、呆然とした顔をしている。

行くよ？
と、口の動きだけで伝える。
辛うじて頷きが返ってくる。
なんだか顔色が悪い気がしたが、星明かりの下で見ているからかもしれない。
エステルは自分の心配をそう考えて押し殺した。
階段を昇り、宿の傍らを通り過ぎて、街道まで出る。
ようやく声を出しても平気だと思えるところまでやってきて、
「で、どうするの、シェラ姉」
「ほら、ヨシュアが言っていたでしょう？　空賊たちは北側での仕事を諦めて南で動いているはずだって。あの二人はアジトからここまでどうやって来たと思う？」
シェラザードに言われて、エステルの脳裏に閃くものがあった。
「……船に乗って？」
「そう。今この隙に空賊艇を探すのよ。定期船より小さいとはいえ飛行艇だもの、あの大きさだと、ヨシュアの言ったように、それなりの拠点がないと留めておけないはずでしょ」
「だったら、あいつらが戻るときに後をつければ……」
「それだと制圧すべき敵の数が多くなる」
ヨシュアが冷静に指摘した。もうすっかりいつものヨシュアに戻っていた。

（さっきの何だったんだろ？）
気にはなったが、今はそれを気にしている場合ではない。
「オッケー、わかった！　でも、どこを探すの？」
「それについては、ちょっと思い当たる場所があるのよね。ちょうど街道の先にあれがあったはず……。行きましょ！」
欠けた月がようやく東の空に昇ってきていた。
シェラザードが先頭に立ち、エステルたちは歩き始める。
半刻ほど街道を戻ったところで、シェラザードの指示で森のなかへと続く小さな脇道に入った。ヨシュアもどうやらその道の先に何があるかを知っているようだった。
ほどなくして、木々のまばらになった開けた場所へと突き当たった。
「なるほど、ここですか……」
ヨシュアが小声で言った。
森のなかの空き地に欠けた月に照らされて塔が聳（そび）えている。
「ロレントで見たのにそっくり」
エステルが思い出したのは、王国内に四つあるという古代文明の遺跡のひとつ、《翡翠の塔》だった——ということは、もしやこれは……。
「形はね。石の色が違うんだよ、エステル。今は暗すぎてわかりにくいけど」

「色？」
「この塔は琥珀色の石を組み上げてできているんだ」
ヨシュアが解説してくれた。
だから《琥珀の塔》と呼ばれている、と。
「塔のことは今は置いておきましょう。それよりアレをどうするかよ」
シェラザードが塔の前の開けた場所を指さした。
そこには《カプア一家》の空賊艇が月に照らされて鈍く光っていた。
「確かにここなら街道からちょっと外れてますし、充分な広さがありましたね」
ヨシュアが言った。
古代文明の遺跡には魔獣が棲みついていることも多く、旅人たちも滅多なことでは近寄らない。《翡翠の塔》でもそうだったように、塔の周りは切り開かれていて、ちょっとした空き地になっていた。
短い時間ならば空賊艇を留めておくには絶好の場所だった。
「で、どうしますか？」
ヨシュアがシェラザードに問いかける。この場の指揮はシェラザードに委ねることにしたようだ。
「やっつけないの？」

エステルはとりあえず言ってみる。
「できないとは言わないけど、けっこう数が多いね……」
見張りを含めて、かなりの数の空賊たちがうろうろしている。
だが——。
「大丈夫だって。やれない数じゃないよ。このまま一気にケリを……」
「フッ……、それはどうかと思うけどね」
背後から掛かった声に、エステルは反射的に振り返った。拳を握りしめながらだった。
そのまま相手を殴り倒してしまいそうなところを、辛うじて踏みとどまる。
相手の顔が月光に曝(さら)されて見えたからだ。
「オリビ——！」
「静かに……あいつらに気付かれるよ」
危うく大声になるところを、ヨシュアに制されて抑える。
声をかけてきたのは帝国からの旅人、オリビエだったのだ。
「驚いたわね……明日まで起き上がれない状態だと思ったのに」
「フッ。胃のなかのものをすべて戻して、冷たい水を頭から何度か被ってきた。こんな面白い場面を見逃すなんてできないからね」
ちょうど宿を出たところで街道を戻るエステルたちを見つけたらしい。そしてこっそりと後

をつけたわけだ。
「うわぁ……」
　確かに、見ればまだ髪がわずかに湿っている……。
「すごい執念ですね」
「それはともかく、ここで戦うのは下策だよ」
　オリビエに言われて、エステルは思わずむっとしてしまう。悪党を見逃せと？
「なんでよ？」
「だって、アジトの在り処がわからないじゃないか。捕えた彼らが口を割ってくれるという保証はないだろう？」
「そ、それはそうだけど……でも、このまま逃がすよりマシじゃない？」
「もっといい手がある――と言ったら？」
　オリビエが闇のなかで微笑んだ。
「……聞きましょう」
　シェラザードが静かに見つめ返しながら言った。
「フッフッフッ……。いいかい、諸君。見た感じでは、あそこにいるのは手下たちばかりだ。誰も指示を下している様子はないからね。ということは、彼らのボスが戻ってきたときにはみんなで出迎えに出るだろう」

「……それで？」
「その瞬間がチャンスなのだよ。彼らの隙をつくのだ。具体的には――」
　オリビエの告げた作戦にシェラザードだけでなく、エステルとヨシュアも驚き、呆れた。
　そんなにうまくいくだろうか。
　そう思ったのだ。
「やってみる価値はあると思うが？」
　オリビエが自信ありげに言って、しばらく考えた末にシェラザードが決めた。
「やって、みましょうか」



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.112

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！





1 4名様
『イースⅨ 限定スリムボトル』［RED］or［BLACK］
『東京ゲームショウ2019』会場限定の非売品グッズ『イースⅨ 限定スリムボトル』を4名にプレゼント!!（※色はランダムです）

2 2名様
「閃の軌跡」2way アクリルキーホルダー
クルト・ヴァンダール（青）とアッシュ・カーバイド（赤）の限定アクリルキーホルダーを各1名にプレゼント！ 欲しいキャラ名か色を書いて応募してね！

ご応募は特設サイトまで ▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.112プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①真・夢幻回廊で組んでみたいパーティーは？
　アンケート②『創の軌跡』に登場して欲しいキャラクターは
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：創の軌跡最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC
　～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 空の軌跡

応募締め切り　6月26日（金）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。